

## 回想の両先生

福井孝治<sup>\*</sup>

今年の冬は健康がすぐれず、洛北法然院にある河上肇博士の墓前の梅花もつに見る機会にめぐまれなかった。法然院には河上博士の墓のほかには河田嗣郎博士の墓がある。河田博士は、周知のように、旧大阪商科大学（現在の大阪市立大学の前身）の初代学長であり、今日の市大の商学部や経済学部、さらには経済研究所に残っているあのリベラルな学風は、河田博士の貴重な遺産であるといつてよいと思う。河上博士と河田博士とは「交契久し35星霜」と河田博士の逝去を悼んだ河上博士の詞にあるように永い間の友人であり、河田博士の墓碑の文字は河上博士の筆になるものである。青年は前望し老年は回顧するといわれているが、わたくしもいつの間にか老年の部類に入り回顧に費す時間が多くなった。特に最近のように健康にめぐまれない時間がつづく和一層回顧的になる。そして、いつも浮んでくるのは、河上、河田という2人の先生の面影である。

わたくしが河田先生と親しく接触するようになったのは、昭和4年旧大阪商大へ赴任してからのことである。もちろん、それ以前に京大の学生として河田先生の農業経済の講義を聞いた。河田先生の講義は非常に話術に巧みで聞いていれば面白かったが、要領筆記すると2時間の講義がノート半ページくらいですみ、わたくしには平凡な感じさえた。この点、一語一語に力をこめ腹の底から出るような声でじゅんじゅんと説いていかれる河上先生の講義と対照的であった。しかし、大阪商大へ赴任し上長としてつかえるに至って河田先生の偉さがわかってきた。事物の核心を的確にとらえテキパキと処理していく明晰な頭脳と行政的手腕は、そうした方面に無能力であるわたくしには、一つの驚きであった。

しかも、あの多忙な学長職にもかかわらず、河田先生の研究意欲は少しも衰えなかった。学長室へはいついっていくと、独りの時はいつも横文字の書物をかたわらに原稿を書いておられた。教職員の研究報告会にも時間のゆるす限り出席され、若い者たちに負けることなく率先して質問をされた。その質問がまた単なる質問でなく頗る肯綮に当たることが多かった。わたくしなどは、一面では先生の頭の鋭さに驚くと同時に、他面では報告者にちょっと気の毒になり、もう少し鋭鋒をゆるめら

<sup>\*</sup>ふくい こうじ 大阪経済大学教授

れることを期待したことさえあった。河田先生は頭の回転の早い、そして筆の立つ先生であった。先生が所長をしていた経済研究所の若い研究員の諸君のうちには、所長から与えられた研究テーマの処理が遅くて御機嫌を害した経験のある人がかなりいると思う。わたくしたちは、こうした好学的な学長の統率の下に、そして当時としては、東京、神戸、大阪のいわゆる3商大のうちで恐らくは一番良い研究条件にめぐまれていた大阪商大で、研究に打ち込むことができたのである。

河田先生が学生をしておられたのは、昭和3年6月から17年5月逝去されるまでの10余年間であり、いわゆる大正デモクラシーの時代が終り、学問思想の自由という点から見て大学行政に様々な困難が加わってきた反動の時代であった。こうした時代に学問の性質をよく理解した河田先生を学長として持ったことは、大阪商大にとって最も幸いなことであったと思う。昭和8年のいわゆる滝川事件によって恒藤恭、末川博の両教授が京大を退任せられると、すぐ専任講師として両先生を大阪商大へ迎えたのも河田学長の決断によるものである。今の人々には、このようなことは何でもないことに思えるかも知れないけれど、当時の状況を顧る時、特に大学の最高責任者としては、相当の勇断を要する人事であった。恒藤、末川両先生が長い間講師で教授になれなかったのも、文部当局が許さなかったからである。やせて弱々しい外見にかかわらず河田先生は内に強いものを蔵しておられた。なお、河田先生は上京の折々に出獄後の河上先生を訪ねておられたことをつけ加えておく。

河上先生とわたくしとの交渉は河田先生の場合に較べるともう少し古い。河上先生あの洛陽の紙価を高めたといわれる貧乏物語が大阪朝日新聞紙上に連載されはじめたのは、わたくしが高等学校へ入学した年、すなわち大正5年の秋のことである。貧乏物語は当時の青年学徒たちに実に大きな影響を与え、社会の仕組について真剣に考える機縁となった。大正6年の正月に帰郷した時中学の同窓たちと盛んに貧乏物語について論じたものである。矢張り同じ正月のことであったと記憶しているが、京都大学法学部の岡村司という先生が、大阪朝日新聞の新年号に「天才ブルードン」という論文を寄稿された。この論文からもわたくしは大きな刺戟を受けた。

高等学校を出たならば京都へ行こう、そして経済学をやろうというわたくしの決心はこうしたことによって決められた。わたくしは当時名古屋にあった第八高等学校の生徒であった。今から考えると甚だ非礼なことだが、経済学を勉強するにはどのような書物が良いかを往復葉書で河上先生におたずねしたことがある。わたくしは2度往復葉書を出し2度とも先生から返事をいただいた。この葉書は何よりの記念として大切にしていたのだが、余り大切にしすぎてどこかへしまい込み如何に捜しても見当らない。しかし、内容は半世紀以上たった今日もなお良く覚えている。一般的原論的なものとしてはタウンシグとフィッシャーの経済学原理、キャナンの

「富」を、分配論に関するものとしてはクラークやカアパーの富の分配を、マルクシズム関係のものとしてはブディンのカール・マルクスの理論的体系とウンターマンのマルクス経済学を推薦して来られた。河上博士は色々な機会に自分は決して始めからマルクスを盲信して出発した訳ではなく、むしろ、ブルジョア経済学、非マルクス経済学から出発して一步一步マルクスへ近づいて行った、ということを書いておられるが、その通りであることは上記の返信の内容からしても明らかである。

わたくしは大正8年、すなわち経済学部が独立した年に京大へ入学したのであるが、その時に聞いた河上先生の講義はまだ資本論から甚だ遠いものであった。わたくしが河上先生の指導の下に書いた卒業論文に至っては、マルクスとはほとんど関係ないものであった。わたくしが京大へ入学した当時の経済学部の制度はちょっと変っていた。今日のような学科目制でなく学年制であり、3カ年で卒業できる点は法学部などと変りなかったが、3学年終了の時に限り普通の試験のように講義のノートによる筆記試験を受けてもよいし、論文試験を受けてもよい、ということになっていた。すなわち論文を提出すれば講義の試験を受けなくてよいのである。論文試験を希望する者は3年生になった時その旨を申し出でなければならぬ。わたくしは、もちろん、論文試験を申し出た。その当時の学部長は財政学の神戸正雄先生であったが、早速学部長室へ呼ばれて普通の試験を受けるよう懇々と説諭された。論文試験だとそれだけで成績がきまってしまう危険が大きいというのが趣旨であった。わたくしは論文試験を受けたいと頑張って結局許されることになった。許可されると教授会の決定で指導教授がきまる。(つけ加えておくが当時はまだ今日のゼミナール制度はなかった)。経済学部の最長老教授の田島錦治先生と河上先生とがわたくしの指導教授ということになった。その頃は資本及び利子の問題がブルジョア経済学における重要な問題であった。わたくしがクラークやカアパーなどを読んでいた関係もあり、河上先生とも相談の結果論文の題目は「ベーム・バヴェルクとクラークとの利子論の比較論評」ということになった。今から考えるとよくもこんな大きな問題を選んだものだしささか恥しくなる。論文試験を受けたのは、結局、和歌山高商(現在の和歌山大学)の教授になった岩城忠一君とわたくしだけであった。岩城忠一君と九大へ行った森耕二郎君の2人はわたくしの最も親しい同期の友人であったが、2人とも既に鬼籍の人になってしまった。この論文試験の制度は、指導したり審査したりする教授の側からすれば大変労の多いことであったろうけれど、制度自体としては甚だ興味ある有益な制度であったと思うのだが、残念ながら間もなく廃止された。

わたくしは大正11年に大学を卒業し、翌年の2月には既に留学のため日本を離れていた。日本を離れる時は、出来たらフライブルクの大学で勉強したいと思ってい



に頼るより仕方がなかった。シュトライザントはそうしたものを比較的良好に集めてくれた。店主自身の語ったところによると、マルクス・エンゲルス研究所の初代所長のリヤザノフなども、しばしばここを訪れたようである。日本人では榎田民蔵氏のことをよく知っていた。わたくしと同じ頃の留学生では、向坂逸郎氏がよい顧客であったようである。ある日わたくしがシュトライザントに立ちよったところ、店主が珍しいものがあるというて奥から持ち出して見せてくれたのが、あの独特の書体で一見してそれとわかるマルクスの手紙及びこれと対照的な達筆なエンゲルスの手紙であった。わたくしは即座に譲ってもらうことにした。代金はマルクでなく英貨で支払ったが案外安かったことを記憶している。大正14年春帰朝し河上先生のところへ挨拶に伺った時、最上のおみやげだと思ってこの手紙を持参した。ところが先生は、個人が私有するのは惜しい、どこか適当な所へ収めた方がよいというて受取られなかった。それから2、3ヶ月立って河上先生から、大原か京大へ収めたらどうであろうか、大原では相当な価格で買いつてもよいような意向である、という便りがあった。これに対してわたくしは自分の母校である京大へ寄贈することにした旨書き送った。最近の朝日新聞で平井俊彦教授が解説しておられるエンゲルスの手紙は、もう一つのマルクスの手紙と共に以上のようないきさつで京大経済学部へ収まることになったのである。

なお、最後につけ加えておくが、わたくしは大正14年春から昭和4年春まで足かけ5年間、福島高商の教壇に立ち、従って河上先生の思想的活動の最も旺盛であった時代に先生の身边から遠のいていたことになった。